

二〇一七年度

二月三日入試

国語 (50分)

注意

- 1 開始の「チャイム」が鳴るまでは、中を見てはいけません。
- 2 答えはすべて解答题紙の解答らんには、はっきり書きなさい。
- 3 終わりの「チャイム」が鳴ったら、とちゅうでもやめなさい。
- 4 問題のページは、3-1 から 3-13 まであります。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。)

学校からかえり道、いつもならばお友だちといっしょにおしゃべりなどしながら、ゆっくり歩くのですが、きょうの朝子は早くおうちへかえりたくてそれどころではありませんでした。学校の門を出るなり、仲よしの道子にまで、こういいました。

「わたし、きょうはとつてもいそがしいのだからさきにかえるわね。」

①そして道子のへんじもきかないで、とっととかけ出しました。手さげの中の筆バコが、かけ足にちょうしをあわせてことごと音を立てます。お寺のわきを通って、みかん畑の下の細道をかけぬけて、小川の橋の近くまできたとき、朝子はうしろにやはり自分と同じように走ってくる足音がきこえると思ったとたん、

A「まって。」

と呼びかけられました。弟の②一夫です。それをきくと、朝子はますます力をいれてかけ出しました。けれど、すばしっこい一夫にかないつことがないことに気がつくとき、橋を駆けぬけたところで急に足をゆるめ、畑の石がきに片手をよせて、うしろむきのまま③でいきをしていました。すぐにおいついた一夫も同じように石がきに片手をかけハアハアと口をあけて、早い呼吸をしました。顔を見あわせたまま二人はしばらくのあいだ、なんにもいえませんでした。しかし、二人ともいいようのないよるこびがその体じゅうにあふれているようです。二人のすがたをみて、畑のすみのブタごやの中から、二ひきのブタがくびをのぞかせ、しきりにぶう、ぶうと呼びかけています。食べものでもくれるかとブタは思っているのですが、きょうの二人にはブタにもかまっていられないほどの大事件が、心をわくわくさせていたので、ブタのよび声も耳に入らず、なたねの花の美しさにも目がとどかないようでした。

B「ねえちゃん、わかった、あれ。」

一夫がきくと、朝子はくびを横にふり、

「ううん、まだわかんない、だってエビスヤにはあめやチョコレートや、こどものおもちゃしか売っていないよ。大人のものなんか一つもありやしない。」

⑤「そうさ、だからぼく、町まで買いに行こうかと思うんだけど。」

「でも、町まで行くには、おかあさんにいわなくちゃ。」

「だからおかあさんにそういって、バスにのつていこうよ。」

「バス代が十円かかるわ、そしたら、十円ひいたらもう二十五円しかのこらないわ。それで何か買える。」

「買えるさ、だからバスにのつていこうよ。」

「でもさ、おかあさんにいわないで、きゅうによるこばしてあげたいの、わたしは。」

「それもそうだね。ぼくたちからおみまいを上げますっていったら、おかあさん、びっくりするぞ。」

大事件というのは朝子と一夫と二人きりの考えで、病気でやすんでいたおかあさんにおみまいをあげようというのです。しかもその病気というのが、おかあさんのおなかに赤ちゃんが生まれかけているためだとわかって、みんなでよろこんだのはきのうのことです。めったに病氣などしたことのないおかあさんが、きゅうにごはんが食べられなくなり、やせてしまわれたので、朝子も一夫もきのうまではずいぶん心配していたのです。

麦畑の中の細い道を二人はあとさきになって歩いていました。もう走ったあとの胸のどきどきはとつくにずまっています。一夫がうしろの朝子をふりかえって、

「ねえちゃんは、男の子と女の子とどっちが生まれると思う。」
と、にこにこ顔できました。

「そんなことわかんないさ、でも女の子だいたいと思うわ。」

「ふうん、ぼくは男の子だ、ぜったい。」

一夫かずおがきみかえった声でいいました。朝子あさこは姉さんらしく笑って、

「だってさ、生まれてみなくちゃわからないじゃないの。」

「でもさ、ぼくは男の子をうんでもらうためにおみまいあげるんだよ。」

「じゃあ朝子は、女の子のためにおみまいあげるわ。女の子らしいものあげるわ。」

「ぼくだって男の子らしいものあげるよ。ええと、ええと……。」

一夫はしきりにくびをひねったあと、

「ケン玉。」と大声でいいました。

「じゃ私はお手玉。」

⑥ しかしいつたあとで、二人はおかしくなつてケラケラ声をあげて笑いました。ケン玉やお手玉をもらうのは自分たちでなく、おかあさんなのだと思つたからです。おかあさんのよろこぶものは何だろう。自分たちのつかわずにもつているおこづかい二人分あわせて三十五円で買えるもの。きのうから二人はそのことばかり考えていました。

⑦ 「ね、何かいい考えないの。」

一夫がたずねますと、朝子は、あつと急にいい考えが浮かんだような顔つきをして、
「いいこといつたげる。」

とないしょ声で一夫の方へよつていきながら、ひよいと一足だけ一夫の先になり、そしてさも大事件そうに一夫の耳に口をよせました。⑧ 一生けんめいの一夫の耳に、思いがけない言葉がそそぎこまれました。

「イイコト コトコト コンペイト ナカワツタラ ウドンノコ。」

そして、わあつといいながらかけ出しました。一夫もなにくそとおいかけました。もう家が目の前のところだったので、二人は土間の入口でいっしょになり、もつれあつて家の中にとびこみました。ただ今ともいわずにドタバタつかみあつている二人をめずらしくおきていたおかあさんが笑つてみていました。つかみあいながら一夫からそのわけをきいたおかあさんも、どつちに肩かたをもつこともできず笑うよりほかなかつたのでしょうか。イイコト コトコトは、しょつちゅう二人が※かつぎあつている言葉だったからです。やつとおさまつた二人に、おかあさんはいいました。

「ね、おふろに入りたいのだけれど、二人でお水を入れてくれない。おふろに入って、夏みかんでもたべたら、おかあさんはもうもとの元氣になりそうよ。でも、もう夏みかんはどこにもあるまいし、あつても高く買えないでしょう。せめておふろに入りたいの、水をいれてくれたら、たくのはおかあさんがするからね。」

それをきくと、二人はすぐはだしになつて水くみをはじめました。ふろばと井戸いどばたをバケツ・リレーをやりながら、だれにもさとられぬように、二人はちらり、ちらりとささやきました。耳に口などよせずに、そしらぬ顔のまま、

⑨ 「こんどはほんとにいいこと。」

朝子がいうと、一夫が、

「ウドンコだったらひどいぞ。」

するとその次に朝子^{あさこ}が、

「ナツミカン！」

こんどは一夫^{かずお}で、

「サンセイ。」

水を入れてしまうと、二人はそうと家を出ました。このへんは夏みかんのとれる土地だけれど、もうみかんも花の季節になつているので、どこにも売っていませんでした。しかし、みかん畑をたくさんもっている五郎^{ごろう}さんの家にだけは、毎年かこい[※]の夏みかんがあつて高いねだんで売っているのを、二人は知っていました。五郎さんのうちはお寺の上にありました。大きな門のわきのくぐり戸をはいつてゆくと、五郎さんのうちのおばさんが、土蔵の中から出てくるところでした。土蔵の石段の上にいるおばさんに、

^C「おばさん、夏みかんある。」

^D一夫がたずねると、おばさんは少しばかり用心ぶかそうな目をして、

「どうしたの。」とききました。朝子が、

「うちのおかあさんが病気で、それでほしいの。一つだけわけて下さい。」

おばさんはきげんのいい顔になり、

¹⁰「一つといわずに、二つでも三つでも。」

といました。二人は顔を見あわせてしばらくだまっていたましたが、やがて朝子は決心して、

¹¹「おばさん、三十五円ほどのを一つちょうだい。三十五円もつてきたの。」

「ああ、そうかい、よしよし。」

おばさんは土蔵の中から大きな夏みかんをもつてきてさし出しながら、

「はい、とびきり上等のをあげましょう。それからこれはおまけだよ。」

¹²そういつて小さいのを一つそえてくれました。

それをいち早く受けとった一夫は、両手で胸にかかえて五郎さんの家の門を出るなりかけ出しました。そのあとを朝子も走りました。家に近づくと、ふるばのえんとつからはもう煙^{けむり}が出ていました。

〔壺井栄「夏みかん」『壺井栄全集10』より〕

※(注) かつぎ——「かつぐ」とは、からかうという意味。

かこい——野菜や果物などを、土蔵などに貯蔵しておくこと。

問一——線①「道子のへんじもきかないで、とつとかけ出しました。」とありますが、この時の朝子は どう思っていましたか。解答らんの「と思っていた。」につながるように文中の言葉をできるだけ使つて、十字前後で答えなさい。

問二——線②「でいきをしていました。」とありますが、「でいきをする」とは「苦しそうに息をする」という意味の慣用句です。にあてはまる言葉として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 胸 イ 鼻 ウ 口 エ 肩^{かた}

問三 —— 線③ 「二人ともいいよりのないよろこびがその体じゅうにあふれているようです。」とありますが、二人はどのようなことについてよろこんでいると考えられますか。解答らんのこと」につながるように文中から二十文字以上二十五字以内でぬき出し、その初めと終わりの五字を答えなさい。

問四 —— 線④ 「ブタにもかまってもらえないほどの大事件」とありますが、「ブタにもかまってもらえないほどの大事件」とはどのようなことですか。答えとなる次の文の にあてはまるように、文中から二十文字以上二十五字以内でぬき出し、その初めと終わりの三字を答えなさい。

朝子と一夫の二人で と考えたこと。

問五 —— 線⑤ 「だからぼく、町まで買いに行こうかと思うんだけど。」とありますが、なぜ「町まで買いに行こうか」と思ったのですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア おかさんが朝子と一夫の二人だけで町へ行つたと知れば、よろこんでくれると思ったから。
- イ 町のお店ではおかさんのおみまいだけでなく、自分のほしいものも買えるから。
- ウ 歩いて近所のエビスヤに行くよりも、バスに乗って買い物に行きたかったから。
- エ 近所のエビスヤには、おかさんのよろこびそうなものは売っていないさそうだから。

問六 —— 線⑥ 「二人はおかしくなっていてケラケラ声をあげて笑いました。」とありますが、二人にとっておもしろいこととはどのようなことですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 休んでいるおかさんのおなかの赤ちゃんがまだ男の子か女の子かわからないのに、男の子が生まれるか、女の子が生まれるかでもめたこと。
- イ おかさんにおみまいであることを忘れて、自分たちの気持ちを優先し、男の子用にするか女の子用にするかを二人でむきになって話し合ったこと。
- ウ 病気がちなおかさんにおみまいをあげることになって、何を選んだらいいか見当がつかず、結局自分たちが前からほしかったものしか思いつかなかったこと。
- エ おなかの赤ちゃんへのおみまいを選ぶはずが、赤ちゃん用ではなく自分たちくらいの年の子ども用のものを選んでしまったこと。

問七 —— 線⑦ 「ね、何かいい考えないの。」とありますが、「いい考え」とは何についての考えですか。文中の言葉をできるだけ使って二十字前後で答えなさい。

問八 —— 線⑧「一生けんめいの一夫の耳に、思いがけない言葉がそそぎこまれました。」とありますが、一夫かずおにとって「思いがけない言葉」とはどのような言葉でしたか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 一夫がきいたこともない呪文じゅもんのような言葉。
- イ 二人がいつもふざけて言い合っている言葉。
- ウ 一夫の予想を上回るすばらしい言葉。
- エ 二人にしかわからない心の通い合う大切な言葉。

問九 —— 線⑨「こんどはほんとにいいこと。」とありますが、朝子あさこの思いついた「ほんとにいいこと」とは具体的にどのようなことですか。解答らんの「こと」につながるように十五字以内で答えなさい。

問十 —— 線⑩「一つといわずに、二つでも三つでも。」の後に省略されている言葉として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 好きなだけ食べていっていいよ。
- イ おかあさんなら食べられるよ。
- ウ 必要なだけわけてあげるよ。
- エ 多いほど安くしてあげるよ。

問十一 —— 線⑪「おばさん、三十五円ほどのを一つちょうだい。三十五円もつてきたの。」とありますが、ここには朝子のどのような気持ちがかめられていると考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 夏みかんをたくさんもらってもおかあさんは食べきれないと心配する気持ち。
- イ おばさんに二つも三つも売りつけられないように用心する気持ち。
- ウ 自分たちのおこづかいでおかあさんにおみまいを買ってあげたいという気持ち。
- エ 上等な夏みかんをただでほしいと言い出せず、えんりよする気持ち。

問十二 —— 線⑫「それをいち早く受けとった一夫は、両手で胸にかかえて五郎ごろうさんの家の門を出るなりかけ出しました。」とありますが、この時の一夫の気持ちとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア おまけにもらった夏みかんは自分のものなのだと一人ひとり占めしたい気持ち。
- イ おみまいの夏みかんをあげて、おかあさんのよろこぶ顔を早くみたいという気持ち。
- ウ 夏みかんを手に入れたのは姉の朝子ではなくて自分なのだとほこる気持ち。
- エ 姉の朝子よりも早く家に着き、自分がおかあさんと一番に会いたいという気持ち。

問十三 文中の――線A～Dの会話文の中で、疑問や質問を表していないものを一つ選び、その記号を答えな
よ。

問十四 この文章の説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 朝子と一夫の行動や会話を丁寧^{ていねい}にえがくことで、おかあさんに対する二人の思いやりの気持ちを表現している。

イ おかあさんに対する朝子の気持ちの変化を、ブタや夏みかんといった朝子の目にうつる情景を通してえがいている。

ウ おかあさんへのおみまいという読者が共感しやすい出来事を通して朝子と一夫の不安を表現している。

エ 朝子と一夫の会話を次々とたたみかけるようにならべることで、子どもだけで買い物に行く二人の緊張感をえがいている。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。)

個々の植物の季節は、それぞれに意味があり、時期もほぼ定まっています。それでも、開花や芽ぶきや紅葉の時期が年によってはかなり異なることは、自然に関心のない人でさえも、「今年がとくに早い」とか、「今年はいつまでも紅葉がはじまらない」などと気になる現象です。こうした植物季節の年による早かったりおそかったりという現象も昔から注目されてきました。とくに、ソメイヨシノの開花は、サクラ前線として毎年の季節の話題になるので、気象庁で長らく研究、調査がおこなわれており、その開花日が直前の気温によってほぼ予測できるまでになっています。しかし、人里に植えられたソメイヨシノは例外で、野生の植物の季節の記録は、個人的に関心が高くてどこにも発表されないので、野生植物の年々の季節変化の全体像はまだ十分には解明されていません。ここでは私が志賀高原で調査してきた事象についての、年による季節変化をいくつか紹介しましょう。

植物季節について、マスコミの方からの問い合わせがもつとも多いのが「今年の志賀高原の紅葉(そのきれいさ)はどうですか」というものです。それで、秋の連続写真の九月から一〇月の九年間分を解析してみました。まず写真のなかで紅葉の目だつ樹木を二〇本ほど選びました。九月から順に毎日の連続写真を見て、それぞれの個体の紅葉度を、①緑、②少し色づく、③紅葉五〇パーセント、④すべて紅葉の四段階に判定し、全部を平均した値をその日のこの森の紅葉度として、その進行曲線を描きました(図1)。その九年間分を比較してみると、つぎのようなことがわかりました。

秋の最盛期は九年間の平均では一〇月一二日、年によるその差は最大で九日でした。また年による差は、紅葉の初期ほど大きく、終期は毎年ほぼ同じでした。また、人が感じる年による紅葉のちがいは、その時期ではなく、おもに紅葉の進行のしかたにあることがわかりました。

志賀高原では、紅葉の初期はヤマウルシやタカネザクラなどの赤く色づくものが多く、それらが落葉をはじめ後半に、シラカンバやダケカンバなどの黄葉がはじまります。ですから、この前半の紅葉期と後半の黄葉期とが比較的短い期間で連続する年は、紅葉と黄葉が混在して「にぎやかな秋の年」になるのです。

一九八二年はほんとうにきれいな紅葉でしたが、寒波によってあっという間に落葉して、「秋」は早く終わりました。それに対して、八三、八四年のように、前半の紅葉が早くはじまり、紅葉が落ちたのちに後半の黄葉がおくれてはじまると、なんとも見栄えのしない年になります。

こんな年々の秋のちがいの、長年記録をとり、自然を見つづけることによって、やっとわかってきました。

教育園内には高山植物園があり、その二二三一種の開花期を四年間、調べたことがあります。その開花種数を五日ごとに整理してみると、木の花は春から初夏に、草の花は夏の八月にもっとも多くなっていました。そして、その中間の七月下旬にはやや開花する種類の少ない時期があつて、花にも「端境期」があることがわかります。四年間の開花日の年によるちがいは、おもに気温によっており、開花の一〇日ほど前の気温の影響が強いことがわかったのです。

ただ、こうして全部の種類の開花や季節を長年記録しつづけることは、それだけを仕事にするのではないかぎりむずかしいことです。それで、ブナの実の豊作年のように、年によって目だつた変化を示す表(表2)

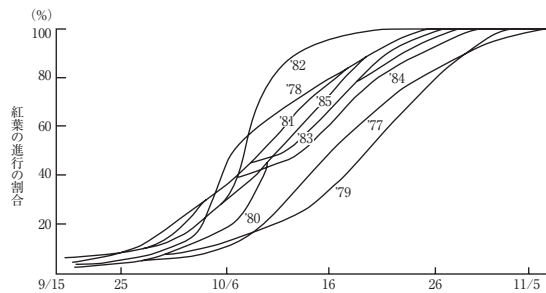


図1 紅葉の進行曲線(志賀高原、1600m)

③ のようないくつかの現象についてだけ毎年記録してゆくことにしました。

ブナは、種子の実りが年によって大きく異なることで有名です。一九七七年から九九年までの二三年間に四回の大豊作が記録されました。とくに九五年は最大の豊作で、ブナ林に入るとブナの実で足のふみ場のないほどでした。豊作年は連続しませんが、〃なり年〃に規則性はないようです。

それに対して、アオダモの開花はみごとなくらいに三年ごとに開花しているのが一六年間にわたって記録できました。一年ごとなら、花や実をつけるのに疲れて一年は休むということでもわかりやすいのですが、三年ごとという例はあまり聞きませんし、おもしろい例だなど思っていました。ところが、九三年の後は、九九年まで三回も連続で一年おきに咲きだしています。④ こんな例からも長期間続けて記録するとおもしろいことがわかるでしょう。

その他にも毎年は咲かなかつたり、実をつけなかつたりする植物がいくつもあり、それらの原因は今のところさっぱりわかりません。今はただこうした記録をとりつづけることでいつかはわかるかもしれないと希望的に願うだけです。それにしても、こうした記録は年に一回しかとれないので、その謎がわかるのはいつになることでしょうか。 (中略)

一年間の季節変化にもたくさんの自然の表情をよみとることができですが、こうした年による変化にも、地球温暖化など地球規模の大きな環境問題が影響しているかもしれません。そうしたことを調べるためにも、自然とのより長いつきあいが必要とされています。

森ばかりでなく、庭や公園の木々や草花の四季の移ろいは昔から人々の目をひきつけ、和歌など、文化の大きな基盤ともなってきました。また、「コブシの花が咲いたらイワシがとれる」といった農作業・漁業などのことわざとしても実際の生活上で、季節の目やすとしての意味をもってきました。しかし、これほど顕著な植物の季節変化ですが、必ずしも十分な研究はおこなわれてきていません。

A、近年の環境悪化や都市化にともなって、人びとの自然への関心はしだいに大きくなっていきます。自然観察会や環境教育の普及はその具体的な現れでしょう。学校の校庭に作られるようになったピオトープや近郊の野山などが、そうした教育的活動の場となることも多いのです。そこで観察会のときだけのテーマではなく、一年を通した、しかも長年の継続的な季節調査をつづけてみるという今日の新しい自然観察の手法を提案したいと思います。

植物季節の具体的な調査は、特定の場所の特定の種類、特定の個体、特定の部位を毎回観察し、記録するだけです。B、学校の庭のサクラの枝に目印のテープを付けるなどして毎日帰りにスケッチするなど、やろうとすれば誰でもいつでも、どこでもはじめることができます。ただ継続することだけが条件です。そんな簡単でとっつきやすい手法でありながら、自然に親しみ、自然のしくみを理解するうえできわめて有効な科学的な視点でもあります。

たとえば、週一回でも何回か続けて植物の枝先を観察するだけで、春ならば日々伸びだし、葉を広げ、蕾がたちまち開いて花を咲かせる、そんな動物にも負けないほどのダイナミックな動きが植物にあることに誰もが驚きの声をあげるでしょう。たとえ変化の少ない夏でも、よく観察すれば、その枝先の小さな芽

表2 種類ごとの開花、結実年

年	1977	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99
ブナ (結実)		×	×	×	×	○	×	◎	×	×	×	×	◎	×	×	×	◎	×	◎	×	×	×	○
アオダモ	×	◎	×	×	◎	×	×	◎	×	×	◎	×	×	◎	×	×	◎	×	◎	×	○	×	○
アズマシヤクナゲ		◎			○	◎		◎	×	×	×			◎				○	○	×	◎	○	○
ワタスゲ				◎			◎	◎								○		○		◎			
アズキナシ						◎		○		○							◎						

◎：大開花 ○：並開花 ×：非開花

が成長し、太った冬芽とうがになってゆくのを見ることでしょう。それはまだ夏の盛りさかなのに早くも冬への準備をはじめている自然界の着実で偉大な季節のリズムなのです。また、同じ一枚の葉を毎日見ること、秋の一夜にして真っ赤に変わるカエデの紅葉の美しさとその変化に息をのむでしょう。

なによりも植物季節の継続的な観察は自然を、ただ見るだけでなく、前回からの変化という、動きの形でそれを理解する点に大きな特徴とくちょうがあります。

ふだんは動かないと思われている植物たちの季節ごとのダイナミクスから、そこに私たち動物と同じような生活の力、力強く生きようとする力を感じることでしよう。最近の教育のなかでは「生きる力」のたいせつさがよくいわれますが、じっくりと時間をかけて特定の植物とつきあうことで感じられる植物たちの季節変化、そしてそれが環境かんきょうや他の植物や虫たちとの関係のなかで意味をもっていることの理解こそ、自らの「生きる力」にも結びつくものとなるのではないでしょう。

これまでも各地で花ごよみなどの植物季節の記録づくりがおこなわれてきました。しかし、それらが全国的、世界的に集約されるほどには資料が収集されたり解析かいせきされたりはしていません。でも、各地で、新しい自然観察、地域自然の理解の手法として、植物季節の観察や記録が普及ふきゅうしてゆけば、やがてはそれらの集大成もおこなわれるでしょう。その時には、日々表情を変える動きのある生き物として植物を見なおすことができるでしょう。そのことによって森はただ材木の資源としてだけそこにあるのではなく、私たちと同じ地球にすむ生き物の仲間なのだという新しい自然観が人びとのなかに創造されるのではないかと思うのです。

(渡辺隆一『森の季節学』より)

※(注) 紅黄葉こうこうよう——秋に木の葉が赤くなったり黄色くなったりすること。

解析かいせき——物事を細かく分けて、調べること。

端境期はたかいき——果物・野菜などが市場に出回らなくなる時期。

顕著けんちやく——さわだっていること。はっきり目立つようす。

ダイナミクス——力強さ、活力にあふれているさま。

問一 —— 線 a 「ダン」を漢字に直しなさい。

問二 —— 線①「人里に植えられたソメイヨシノは例外で」とありますが、「人里に植えられたソメイヨシノ」はどのような例に入らないというのですか。解答らん「例」につながるように、文中から二十字以内でぬき出し、その初めと終わりの五字を答えなさい。

問三 —— 線②「その九年間分を比較ひかくしてみると、つぎのようなことがわかりました。」とありますが、次のア～オの中から、ここでわかったことと合っているものを二つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 年による紅葉のちがいは、ダケカンバの黄葉こうようの進行のしかたによって感じられる。
- イ 紅葉の進行の九年間の平均をとったところ、年による差はほとんどなかった。
- ウ 年による紅葉度の差は紅葉の初期ほど大きく、終期は毎年ほぼ同じであった。
- エ 紅葉の美しさは紅葉期と黄葉期が比較的短い期間で連続するかどうかで決まる。
- オ 紅葉の最盛期さいせいきの平均は年による差が大きく、数値ではとうてい表すことができない。

問四 — 線③「ブナは、種子の実りが年によって大きく異なることで有名です。一九七七年から九九年までの二三年間に四回の大豊作が記録されました。」について、次の1・2の問いに答えなさい。

- 1 表2から「ブナ」の「四回の大豊作」の年をすべてぬき出し、数字で答えなさい。
- 2 ブナの実の大豊作の記録から、どのようなことがわかりましたか。わかったことが書かれている一文をぬき出し、その初めの六字を答えなさい。

問五 — 線④「こんな例からも長期間続けて記録するとおもしろいことがわかるでしょう。」とありますが、「こんな例」のどのような内容を受けて「おもしろい」と表しているのですか。文中の言葉をできるだけ使って、四十字前後で答えなさい。

問六 — 線⑤『「コブシの花が咲いたらイワシがとれる」といった農作業・漁業などのことわざ」とありますが、このように、私たちの実際の生活の中で季節の目やすとして使われることわざとして最も適当なものを次のア〜エの中から選び、その記号を答えなさい。

- | | |
|------------------|----------------------|
| ア 雨ふって地かたまる | イ 自分でまいた種は自分で刈らねばならぬ |
| ウ あやめの花が咲いたら豆をまく | エ 長いものにはまかれる |

問七 文中の A・Bにあてはまる言葉を次のア〜オの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

- | | | | | |
|--------|-------|--------|--------|--------|
| ア なぜなら | イ 一方で | ウ たとえば | エ そのうえ | オ 要するに |
|--------|-------|--------|--------|--------|

問八 — 線⑥「今日の新しい自然観察の手法」について、次の1・2の問いに答えなさい。

- 1 「今日の新しい自然観察の手法」とは、具体的に何をすることと説明されていますか。解答らんの「こと」につながるように文中からぬき出し、その初めと終わりの五字を答えなさい。
- 2 「今日の新しい自然観察の手法」の大きな特徴はどのような点にあると説明されていますか。文中から四十字以内でぬき出し、その初めと終わりの五字を答えなさい。

問九 ———線⑦「自らの『生きる力』にも結びつくものとなるのではないでしょうか。」とありますが、筆者は何が「自らの『生きる力』に」結びつくと言っていますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 植物の季節ごとの動きを理解し、私たちと同じように力強く生きる力を感じる。

イ 植物の季節変化をただ見るだけでなく、しっかりと記録に残しておく。

ウ 最近の教育で言われているように「生きる力」の大切さを伝える。

エ 環境かんきやうや他の植物や虫との関係のなかで人間が生きていることに気づく。

問十 ———線⑧「やがてはそれらの集大成もおこなわれるでしょう。」とありますが、「それら」とは何を指していますか。文中からぬき出して答えなさい。

問十一 ———線⑨「日々表情を変える動きのある生き物として植物を見なおすことができるでしょう。」とありますが、筆者は、「植物を見なおす」ことによって何を期待していると考えられますか。次の [] にあてはまる言葉を文中から二十字でぬき出し、その初めと終わりの五字を答えなさい。

人間が植物を [] と考えること

問十二 次のア～エの中から本文の内容と合っているものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア ふだんは動かないと思われている植物たちも、動物と同じように力強い動きをする場合がある。

イ すべての植物季節を長年記録しつづけることは、単純で簡単な作業であるが、重要である。

ウ 紅葉の時期がおそくなっている年は、環境悪化や都市化の影響えいぎやうが強く出ていると考えられる。

エ 植物季節の具体的な調査は、自然に親しみ、自然のしくみを理解するうえできわめて有効である。

三 次の漢字と言葉に関する問いに答えなさい。

問一 次の①～④の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① オリンピックではキシユを先頭に選手が入場する。
- ② ヨダンはさておき、本題にもどろう。
- ③ ここはジヨウウカ町としてさかえたところだ。
- ④ ご案内モウしあげます。

問二 次の①～⑥の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 目が覚める。
- ② 戦いを前に武者ぶるいが止まらない。
- ③ 磁石で砂鉄を集める。
- ④ ばく大な富をえる。
- ⑤ 除夜のかね。
- ⑥ クラスみんなで合奏する。

問三 次の①～④の熟語の組み立て方にあてはまるものを、後のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

- ① 意味の似た漢字を重ねたもの。
(例 絵画)
 - ② 下の漢字から上の漢字に返って読むと意味のわかるもの。
(例 負傷 ↓ 傷を負うこと)
 - ③ 上の漢字と下の漢字が主語と述語の関係になるもの。
(例 日照 ↓ 日が照る)
 - ④ 対になる意味の漢字を重ねたもの。
(例 大小)
- ア 頭痛 イ 不満 ウ 開会 エ 冷水 オ 分別 カ 強弱

問四 次の①・②の漢字と、後のア～エの漢字を組み合わせて熟語を作る場合、熟語を作れない漢字が一つあります。その漢字の記号を答えなさい。(漢字は上につけても下につけてもよい。)

- | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ① | 有 | ア | 共 | イ | 利 | ウ | 力 | エ | 後 |
| ② | 誤 | ア | 工 | イ | 字 | ウ | 解 | エ | 正 |

問五 次の文の の中にあてはまる適当な言葉を答えなさい。(一マスに一字入ります。)

前の試合では負けたが、今度 勝ちたいと思う。

問六 次の文の——線部「と」と意味や使い方が同じものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

一番仲のよい友だちとけんかしてしまった。

ア あの子はうそをついていないと言っている。

イ 先生方と話し合いをすることになった。

ウ そんなかっこうで出かけたら寒いと思う。

エ この校舎は建てかえられることとなった。

